

# 道徳教育と問題解決

茂 木 喬

Moral Education and Problem Solving

Takashi MOGI

我々の命が一回限りで、はかないものだからこそ、頂いた命への感謝の念も強まる。感謝の心と共に立ち上がるのが自立の心である。自分の命を自分の責任でしっかりと生きるのは当然のことである。自分の命が大切となれば、他人の命も同様であることは容易に想像がつく。そこで思いやりの心が大切になる。その際に、問題の解決ということが、かかわる。解決できる問題とできないものとの、賢明に対処する必要がある。道徳教育が重要とされるのは、道徳的に生きることが社会的に意味を認められる場合である。また問題解決学習についても解決を諦めなくてはならない問題もあり得るので、道徳教育も、問題解決も、現実を重んじた適切な問題の解決が目指されるべきである。

## はじめに

小学校学習指導要領第一章総則においては、「学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間をはじめとして各教科、特別活動及び総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない。<sup>(1)</sup>」と、教育課程編成の一般方針の中に道徳教育が取り上げられている。まことに素晴らしいことと言える。それだけ道徳教育が重視されている証拠であろう。小学校学習指導要領解説の道徳編を見ても、見事な解説が展開されており、実に立派な内容のものとなっている。<sup>(2)</sup>

そのことについては、感心し、敬服するのみであり、何も問題はない。ただ、物事には、色々な側面があるのだから、別の角度から考えてみることの価値も、また認められて良いと思われる。そこで、道徳教育を、一人一人に切実なものとするために、新しい視点を探ってみることとしたい。現在行われているような、自分自身、他の人、自然や崇高なもの、集団や社会といった四つの視点とは、別の切り口から迫ってみたいと思うのである。<sup>(3)</sup>

人間は、自分で生まれようと思って生まれてくるわけではない。気がついてみたら、人間に生まれ、どこかの家庭とか施設とかで、結構大きく育ち、生まれた国の言葉でものを考えるようになっていたのである。どこの家庭に生まれたいと思って生まれたわけでも、どこの国のどんな時代のどの地域に暮らしたいと思って生まれたわけでもないのである。

そうであれば、自分自身を考えるようになった人間が、自分を中心にものを考えることも、また自然の成り行きとってよいのではなからうか。道德こそが人間の生きる道で、道德に反する生き方をする人間は生きる資格を認められないなどと、頑張る必要があるとも思われない。そういう言い方を意味のないこととする立場も考えられるのであるから。

したがって、ここにおいては、現在行われている道德教育の四つの視点などはさておいて、まったく新しい観点から、考えることとしたい。すなわち、自分というものが、気がついてみたらこの世に存在していたのであり、すべては、今の自分が中心となって考えて行かざるを得ないという立場からである。何事も自分自身との関係はどうなっているのか、もう一度はっきり考え直してみるところから、道德について考えてみたい。

## 1 人生の大前提

人間は、自分がなぜ生まれてきたのかとか、何のために生きているのかなどという問いに對して、明確な答えを得る立場にはない。気がついたら生きているだけのことなのだから。

その意味では、確かに、「人間は自由の刑に処せられている」<sup>(4)</sup>とも言える。

しかしながら、また、そうであればこそ、どうせ一回生きるのであれば、自分の生を意味のあるものにしたい、より価値のあることをたくさんやってみたいと思うのも、人情である。自分の人生をより意味のないものにしたいなどは、考え難い話である。

そうであれば、自分に幸せをもたらすことをやって生きて行きたいとか、人に対しても、自分と同様に、幸福にしてあげたいとか考えるのも、また、自然である。但し、この場合の人とは、自分とかかわりのある人、すなわち、自分の人生における隣人のことである。いきなり、すべての人とか言ったところで、見たことも会ったこともない人に対して何をすればよいかなどということは、人間には到底分からない話なのであるから。

よく、他人との共生などと言うが、全く知らない人たちと共生することを考えるのは、余り意味のないことである。どういう意味で、何を目的に、どう力をあわせて、どの人と協力すればよいか、分からないからである。我々は、生活上で自分と何らかのかかわりのある人のことを考えるしかない状況に置かれているのである。

周りを見渡してみると、どうやら、人間の命は一回限りのものである。命はとても大切なもので、誰もたった一個限りしか持ち合わせていない。人間の命は、松の木などの命と比べてみても、それほど長いものとはいえない。大して長くもない命であるのに、一度落としたらもうおしまいであり、命をなくしてから再び生き返るなどということは、まずあり得ない。人間の命がたったの一回限り、一回性のものということを知れば知るほど、我々は自分が与えられたこの一度限りの人生を大切に生きて行かざるを得ない。

その中で、自分とかかわりのある人々にもなるべく良い思いをしながら生きてもらえるよ

うにしたいと思い、自分が人から喜ばれるような生き方をしたいとも思うのである。人間が大変に長寿な生き物であるとか、天下を取り仕切っている存在であるとか、自分が大変な力を持ったものであるとかいうことは、普通の人間が考えることではない。

自分は大きな存在ではない、人間がそれほどの力を持った偉大な存在ではないということが分かれば分かるほど、人間存在や自分というもの、一回限りのそう長くもない命を抱えて生きる存在の価値も、また身に沁みて来るのである。「よい人生はよい社会と切り離<sup>(5)</sup>」せず、自分も他人もそれぞれの幸福を求めて生きているのであるから、互いに支え合えればそれが一番良いと考えるのも、また一つの自然の成り行きであろう。

## 2 自己の生存条件

我々は、知らないうちに人間として生まれ生きているのであるが、人間というのは、死んでしまえばおしまい<sup>(6)</sup>の存在でもある。そうであれば、自分の人生の一時一時、一瞬一瞬を大切にし、充実して生きようとするのもまた人情であろう。

常識的につまらぬことと思われているものも、果たして本当にそうなのであるか。眠ってしまうということは、意味のないことなのであるか。いや、そんな訳はない。人間は寝ないと生きて行けない、死んでしまうのである。腹が減って、物を食べるということは、大して価値のないことなのか。そうではあるまい。人間は食べないでいると、エネルギーが補充できず、やはり生きてはいけないのである。

このように考えると、一般につまらないこととか、余り意味のないこととか思われていることも、もう一度考え直してみる必要があるそうである。眠ることにも、人生のエネルギーを補充する意味があるのなら、夢を見ている時間も、無意識のうちに流れ去っている時間も、必ずしも無意味とはいえないのではなからうか。

我々が自覚的に判断し行動して、表向きの人生を生きているときと同様に、無意識の時間を生き、無自覚な人生の裏道を歩いている場合にも、それなりの意味は存在すると考えることはできないであろうか。生きている時間は、皆人生なのである。「道徳教育は、画一的な人間をつくるものではなく、自らの生き方を作り出すことのできる、主体的、個性的な人間を育成していく<sup>(6)</sup>」ものである。

我々に与えられた時間は、そう長いものともいえない。しかし、だからといって、人生が短い、短すぎるなどと文句を言ったところで、いったい何になるというのであろうか。人間は、死んだらおしまい<sup>(6)</sup>ということは頭の片隅において分かっているながらも、死ぬということなどは余り意識せずに暮らしているのである。

死を考えるとということも、確かに必要ではあろうが、そればかりを考えているわけにもいかない。人間は、常に変動しつつある状況の中で生きているものであるから、それに対処し

ていくのも重要なことである。我々は、変動する状況への対処ということに、一生懸命にならざるを得ないのである。

我々の住んでいる世界は常に変動しており、事情や条件の変更ということもいつも起き続けている。この自然や世界の変動は、人間の意向とは殆ど関係のないところで起きており、実質的には、人間が従うよりないということを経験的な特色としていることである。

主体性が大事であると言われる。「主体的に生きるところに、人間らしい生き方の大切な一面がある<sup>(7)</sup>」というのは、その通りであろう。しかしながら、いくら主体性が大切だといったところで、世界中が人間の主体性を受け入れてくれるというわけにはいかない。道徳の世界で重視されるべきことは、主体性よりもむしろ人間相互の気の配り合いであり、お互いの幸福に対する気配りこそが、大切にされるべきなのではなかろうか。

### 3 人間の状況と道徳

人間に生まれついた我々が、自分自身や他の人に対して、力や助けとなることができるとしたら、それは真に有り難い話である。人間は自分の力ですべてを律している訳ではなく、自分の人生がこれからどうなるのかということについても、自信を持って答えることなどできないのであるから。自分の先行きもよく分からない中で、自他の生活の力になれるとしたならば、それはもう望外の喜びとすべきことに相違ない。

人間についての色々な見方がある中で、世界の中心は人間であるとか、人間の中でも自分自身は中心的な存在であるとかいった考え方も、後を絶たないようである。しかし、それらは、いずれも、自己中心的な考え方の現れそのものと言わざるを得ない。現実には、我々は、「髪の毛一筋さえ、白くも黒くもすることができない<sup>(8)</sup>」のであるから。

世界とか宇宙とかいわれるこの広大な自然の中には、いったいいくつの星があるのか。正確には分からない。しかし、数え切れないだけの多くの星の中で、この地球が中心的な位置を占めるとか、また地球の支配者は人間であるとかいうのは、何の裏づけもない話であって、そうではない可能性の方が遥かに高いことは、自明の理である。

我々は、むしろ、自分も、人間も、我々の住む地球も、世界の中心などとは何のかかわりもないと考えた方がよさそうである。自己中心的な発想にこだわる必要などはさらさらない。自己中心的な発想から開放されて、自由に考えるようになると、その人の考えることの内容も、また大きく変わってくる。人間のなすことは、TPOに応じて、その場その場で異なってくるのである。場面に応じて変わるということは、例えば、表情一つをとってみてもいえることであって、いくら明るく暮らすことがよいことだと言われたところで、悲しい時や眠くなった時に明るい顔をするのは大変に難しいことである。

人間一人一人については、同一性がなくてはならないものとされている。それも当然のこ

とであろう。しかし、実際問題としては、表情から態度、言葉遣いや話す内容など、殆ど何をとっても、人間がいつも同じであることなどはあり得ない。同一性など一体どこにというのが、人間の現実を直視した場合に出てくる言葉であろう。

このようにして見ると、TPOという人間を取り巻く環境の持つ力の大きさが分かってくる。TPOとは、人間一人ひとりの力では、なかなか動かし難いものであって、むしろ、人間一人ひとり、その埒外にあるとした方がよいと考えられるのである。TPOとは、それほどよく変動するものなのである。そう考えると、人間にとってどうあるかというものさしを一度取っ払って考え直すことの意味も、確かにあると思われる。

人間はTPOを踏まえて主体的に行動すべきであると言われる。尤もな話である。しかし、一人ひとりが主体的に行動することにどんな意味があるかと問い直すなら、世界にとっては、人間一人ひとりの主体性など取るに足らぬことという答えも出て来得るのである。

#### 4 問題解決の見直し

今まで我々が大きな問題として考えてきたことが、実は大した問題ではないということになるなら、それこそ由々しき問題であるということになる。なぜなら、我々が扱うべき問題を取り違えて考えてきたということにもなるからである。

確かに、現在までは、この地球以外に人間の住むところがあるなどとは、考えてみもしなかった。だから、我々にとっては、この地球こそが生活の場であり、地球以外のことを深く考える必要もなく、この星のことだけを中心に見てきた面がある。

この地球上を見ている限りは、人間はどうやら最高級の存在である。体の大きさだけを見れば別の話にもなるが、また人間よりも長寿の存在は確かにあるものの、現在知られている限りでは、人間のように言葉を通じてお互いの理解を図るものは、ほかに見当たらない。色々考えても、やはり人間は最高級の動物として、地上に君臨している。しかも、自分という存在は、人間の一員であり、かつ自分の意識を持って物事に対応し、自分と他者とを区別して自分の人生を幸福にするために頑張っている。

我々にとっては、地球という棲家は絶対のものであり、人間という動物も、我々が人間として生まれついた以上、人間中心主義で対応して当然の最高・最善の存在なのである。我々は地球以外に対応すべき世界を知らず、人間以外に頼るべき筋合いを持たないのである。我々が生きる上では、自分の命こそが問題で、これを最大限に大切にすることが必要である。

人間の弱さは、「他の高等哺乳動物のように与えられた環境に適応した生体構造を整えて生まれてくるという強さを持っていない<sup>(9)</sup>」というところにある。すなわち、どう変わるか分からないという弱さであり、「可能性に富んだ弱さ<sup>(10)</sup>」なのである。

地球のことだけを考え、人間中心主義に則って進み、自分を中心としてものを考えるとい

うことには、何の問題もない。もし、何らかの問題があるとするれば、それは、人間が自己中心性を基にして考えてきた結果であるということであろう。

こう考えると、人間中心、自己中心のままで、これからも進んでよいかどうかということが問題として浮かび上がる。これは実は大変大きな問題である。今までの人間観を引き継いでよいかどうか問われるからである。しかし、敢えて言うならば、我々は自己中心の立場からだけものを見てはなるまい。世界の中心が分からなくなるからである。

人間は、個を超えた大きな大きな宇宙的生命力のどこかにかかわりを持ち、それに依存すると同時に参加しているといつてよい存在である。「大きな生命から眺められている存在であり、同時にそれにかかわりを持っている存在だ<sup>(11)</sup>」という厳粛な事実の中に、ヒトという種族は生きているのである。我々は、今一度、この世界がいかなるものか、その中で、人間や自分はどのような立場にあり、どう生きるべきなのかを、問い直してみる必要がある。

地球中心、人間中心、自己中心を離れて考えるなどということには、どれほどの価値があるのか、見当は付かない。しかし、正しく考えるためには、多面的に考えるということも必要であろう。もちろん、地球中心、人間中心、自己中心だけで進んでいってよいとは思わない。何事も一面的であってはならないからである。

しかしながら、人間中心や自己中心の行き方が完全に間違いなのかということ、とてもそうはいえない。人間一人一人は、地球だけが棲家であり、人間だけが自分の属する系統であり、自分だけが真の生きがいを感じ取ることのできる存在だからである。現実性があるということも、真実を表す一つの指標である。

## 5 個性の重視

人間一人一人には個性がある。個性とはどんなものかということ、簡単に言えば、全てなのである。一人一人、名前も違えば顔も違う。顔といったところで、全体のつくりが一人一人違うのみならず、目玉をとっても、歯並びをとっても、さらには、鼻毛の一本をとってみても、いや、細胞の一個を取り出してみても、全て一人一人皆違うのである。

名前や顔はもちろん、考え方や行動の仕方、性格や好み、価値観など全てが異なるのである。したがって、その教育に当たる場合にも、各人の多様な個性をよく理解して、一人ひとりの生き方に十分に配慮した支援・援助を行う必要がある。

個性は、ただそれがあるということに終わるものではない。世界の全てが動く中で、一人ひとりの個性も刻々と変わり、変化し続けるのである。人は、誰も、時間の経過に連れて、動いて行くのである。「生き動く人間の性質そのものが、変化して行く<sup>(12)</sup>」のである。人間の個性をよい方向へ向けて伸ばすことが、道徳教育の目的でもある。

それには、内面教育ということも必要になる。個性とは、内面の心の動きをも含むもので

あるから、外面的な行動に対応するだけでは終わらない。人間の心の内面も、刻々変化し続けるから、その時その時に応じた対応の仕方が必要となる。すなわち、内面教育に限った話ではないが、個性に対応していくには、臨機応変ということが大切になる。これなくしては、個性をよく導くということは難しい。

臨機応変ということは、その時その時に応じて対応を変化させることであるから、教育に当たる者としても、自分の感性を豊かに磨いておく必要がある。個性は、理性的な判断の対象となるだけのものではないからである。そもそも、よいとか悪いとかいうことも、簡単には判断できない。したがって、個性をよい方向に伸ばす場合にも、総合的な判断が必要とされ、理性などに加えて、感性や情操等も大切になってくる。総合的な学習が、「知の総合化の視点<sup>(13)</sup>を重視」していることと、軌を一にする話である。

もちろん、人間のすることに、完璧ということは、まずあり得ない。しかし、その場その場のTPOを十分に考慮しながら、精一杯の情熱的な努力を傾けることは、人間として、教師としての義務とも言えることではなかろうか。TPOを考慮することによって、「人間像は生活内容を伴い、社会的現実と結び付く。人間像は、社会像と結び付く<sup>(14)</sup>」のである。

確かに、人の気持ち、人の心は次々と移り変わり、自分自身としても、どうにもよく分からないということはある。それでよいのである。分からないことを分かったふりをしても何になるのか。分かる分からないよりも、よいか悪いかの方が問題である。

道徳的には、他の人に対し暖かく優しい心をもつのは、すばらしいことである。そのためには、努力が必要であるが、人の心が分かる分からないなどは、余り大きな問題ではない。暖かい心をもつには、少しくらいの苦勞は乗り越えていく必要もあると言える。

## 6 努力・向上心の必要性

人の心が分かるとか分からないとかには、余りこだわり続けても仕様がなない。しかしながら、人間同士がコミュニケーションを深め合うためにも、できることなら、気持ちが通じ合った方がよい。気持ちが通じるということは、分かり合うということとほぼ同義であるが、そのためには、お互いに、自分の心の幅を広く持つ必要もある。

心の幅を広げるためには、物事に対する一面的なこだわりを捨てて、感性をも磨き、情操も豊かに、他の人に対応していくことが必要となる。自分を改善し、他者に対する気配りを豊かにすることで、安心と信頼とを克ち得ることができるのである。そして、人間は、善行と共に、成長を続けていくことができるのである。

子どもは、世の中をよく分かっていないため、他者の援助を必要とする存在である。ただ、援助を必要とすることと、自分で自由に判断し行動することは、両立する面がある。

根本的には、人間は、自分で判断し自分で行動する主体性をもった存在であるから、子ど

もといえども、他人が認めてくれれば自由に行動しようとする。大人は、子どもが誤ったことをしないように、配慮・留意して、支援・援助を行う。「干渉や強制を差し控え、子どもの自発の展開を助け<sup>(15)</sup>」てやるのである。子どもの人格は、大人の捉われのない支援によって、より伸び伸びと成長していくことが出来るのである。

道徳教育は、ある場面一回に限って行われるものではない。普通は、出会いに始まり、別れに終わるものである。教師と児童という場合を取れば、少なくとも年度の開始から年度の終了まで続くというのが一般的なことである。その間に、例えばスキンシップや戒めなどを通じて、互いの気心を通じ、信頼を高め合おうと努めて行くのである。

教師と児童の場合であれば、一方は指導する立場、一方は指導される立場ということで、その違いには大きなものがあるようにも思われる。しかし、同じ人間という観点に立つならば、教師も児童も一人の人間として、よりよい人生を歩みたいと願い、広い立場に立って生きる努力を重ね、教養を磨いているのである。教養を磨くとは、様々なことに対する判断力を広く培い、判断の程度を高めることである。

教師と児童との違いは、世代の差、つまり、より早く生まれたか否かという時間軸上の違いが中心である。将来に向け未来を背負って立つ点においては、共通の立場に立つということが出来る。その時においてとか、現時点においてとかいう風に、時間の流れを止めて考える場合には、教師と児童との間に殆ど超え難い格差が存在する可能性もある。だが、もう少しゆったりした観点に立ち、将来を見通して考える場合には、教師も児童も、共に社会生活を担う存在として、未来に開かれた存在であるということにもなる。

時間を止めて考える必要はない。時間は止まるといことがないのだから。否が応でも、時間はどんどん流れていく。躊躇は許されない。教師は伸び行く児童を育て、共に未来を築くことに向けて、努力すべきである。「我々の学校という意識を保護者や地域社会の人々に育て、教育の責任を学校とともに分担し共有していく<sup>(16)</sup>」ように図る必要もある。

## 7 道徳教育の新たな展開

心の教育とは、教師から生徒に向けて一方的に行われるものではない。教師も人間であるから、自分自身や環境の変化に応じて、刻々と変わりつつある。つまり、心の教育とは、人に向かって行っただけのものではなく、自分自身を伸ばすためにも存在するのである。

社会性を育てる場合、教師が完全に社会性を身に付け終わっているならば、児童の社会性の育成だけを考えればよい。しかし、人間には完全ということはありません。時間がどんどん動くにつれて、状況も変化するからである。社会性の育成には時と場が必要であるが、その時と場が変わり続ける以上、社会性の育成にも、完全とか十分とか言うことはない。

生涯学習という言葉は、時代の進展の中で生み出されてきたものといってよい。時代の変



化は次第に激しいものとなり、現在の人間は日々次々と「新」を知り続けているといつてよい。現代の人間は、毎日、「新」に出会い続け、死ぬまで対応・対処し続けるのである。

毎日毎日「新」に対応し続けるためには、長大な視野と繊細な心とが、同時に必要となる。自分や環境の変化に的確に対応し、条件が変動する中で、生活を展開するためである。

人間はそれぞれ一個限りの命を頂いて生きており、人生がやり直しの効かないものであるからこそ、幸福な人生となるよう、十分に気配りをして生きていくのである。

「人間の外側に生ずる変化とは別に、外側の状態を変えていく人間そのものも、変わっていく。この後者に注目するところから、教育<sup>(17)</sup>が始まるのである。

人間は、お互いに一個限りの人生を歩むからこそ、互いに気配りをする。やり直しは効かないと分かっているからこそ、互いに幸せに暮らせるよう、隣人愛とか仁義とかを大事にして生きる。余りにも自己中心的になっては、他者とぶつかり合い、互いに苦痛を味わう惨めな生活にならざるを得ないから、解脱の努力をする。一方的な考えで走り出してしまうと、様々な側面でバランスが取れなくなるから、中庸の実現に努力をするのである。

このように、振り返ってみると、互いに一個限りの命を生きているのであるから、命を大切にしながら周りの人々を思いやるということが、最低限必要なこととなる。他人と共に命と心とを繋ぎ合って生きるためには、自分がきちんと節度を守り、他人と十分に心を通じ合うこと、英語で言うなら、コントロールとコミュニケーションということが、是非とも必要ということになる。道徳教育の基本的な狙いも、そこに置かれていると言ってよい。

問題の解決ということにこだわりすぎる必要もない。問題の中には、解決が可能なものと、そうではないものがあるからである。人間の力を超える事柄に関しては、無理をしても仕様がなない。自力で解決を図れる事柄に絞って、取り組むことが肝要であろう。

道徳教育には、際限がないようにも感じられる。人間には、完璧とか十分とかいうことが、まずあり得ないからである。繰り返して言うが、人間は、何か一つのことにとこだわって終わるわけには行かない存在である。他人を思いやる心の余裕を持っていれば、その人がどういう判断をし、どういう行動に出るかは、その人に任されたことといつてよい。

## 8 問題解決の営み

問題解決学習における問題とは、子どもが感じる問題であるという立場と、子どもが社会的に問題に取り組むときに現れてくる社会的矛盾であるという立場がある。どの立場にしろ、問題の性格は、「いまだ解決されない問題であるという未解決性と、緊急な解決を必要としているという緊急性を有している<sup>(18)</sup>」、とされる。果たしてそうであろうか。

問題の中には、解決の可能なものと、そうではないものがあると述べた。これは、例えば、人間の生きる意味だとか人間がこの世に存在することの意義だとかをいくら考えても、ま

もな答えは得られようにもないということとも、かかわっている。

我々は、考えれば考えるほど、多くの問題に行き当たる。しかし、そのときに、しっかりと見極める必要がある。これは、自分が取り上げて解決に励むべき問題なのであるか否かを。

自分の力ではいかんとも仕様のない事柄にかかわる必要もなければ、その時間もない。自分に与えられた時間や能力は、余りにも限られている。我々は、自分に与えられた時間やエネルギーを大切に、有効適切に用いなければならない。

有効適切とは、いかなることか。その時と場合によって、判断すべきことである。自分の力でかかわって解決することが可能であり、乗り越えて行けるような問題であれば、そうすればよい。また、自分の力で解決するには、余りにも大きな課題あるいは崇高な課題であって、まともにぶつかってもどうにもならないというような場合には、はじめから問題の解決に向かうことを諦めたり、敬して遠ざける態度を取る方がよいということもあろう。

問題解決学習とは、現実生活の中の問題状況において、「問題の事態を観察し、主体的に解決していく過程<sup>(19)</sup>」をさすものである。場合によっては、これまでの経験や知識を想起しても、問題解決の見通しが立たないということもあり得るのである。

我々は、分からないことは、分からないとはっきり言うべきである。無理に分かろうとしてもどうにもならない。例えば、我々の住む世界、この宇宙とか自然とか言われるものについては、その大きさも、寿命も、我々に計り知れないところがある。また、もし仮に、それについて正確な知識が得られたとしたところで、我々自身の生活や行動にどのような意味があるのだろうか。ブラックホールに吸い込まれてしまうような予感もするのである。

分かるというのは、固定した場面の話とは限らない。この世界は、時間の流れとともに、常に変わりつつあるからである。ある面では、分かることと変わることは結びついている。時間や空間の中で、どのように動き変わりつつあるかが見極められると、それはもう、本当によく分かったということになるのではなかろうか。

そう考えると、物事の完全な解決ということも、また、殆どあり得ないのではなかろうか。問題解決の方法としては、ゆったりと伸びやかに行くことを考えた方がよいことあろう。確かに、人間の持つ一回限りの寿命は限られているし、常に一所懸命に生きるべきだということも、よく理解できるのではあるが、分かることと分からないこととに余り大きな意味の差が出て来ないような場合には、焦っても無駄ということも考える必要があろう。

## 9 問題解決学習の生かし方

急ぐこと、スピードアップすることは、物事の大事な面を見落とすことに繋がりがねない。寿命や能力の限られた人間にとって、人生、世界が、見え難くなってしまうのは、甚だ残念なことである。世界や自分は、いつも、余りよく見えてはいないのであるから。

しっかりとよく見て、判断、行動することが、よく生きることに繋がる面も大きいであろう。しかし、同時に、解決は未解決に繋がっているということも、意識せざるを得ない。我々の生きる世界では、次から次へと問題が継続して生起しているからであり、我々の反応が最適のものであったかどうかについては、明確な答えが得られないからである。

それでよいのである。完全な解決などは、殆どあり得ないからである。我々は、常によりよい解決に向けて、努力する以外に道はないのではなかろうか。総合学習が、問題解決のために有効として大切にされ始めたのも、このような事情によるものと考えてよい。

問題をよりよく解決するには、物事を総合的に捉えて、変化の中で判断し行動することが大切になる。総合的な学習は、独り、児童や生徒のためだけに必要なのではなく、大人や先生自身も、これを大切に、生かしていくべきものであろう。

人間には、解決できる問題とそうではないものがあるのだから、賢明に対処する必要がある。総合的・全体的に、取り組むべき問題に取り組み、人間の幸福に寄与すべきである。常によりよい生き方、より良い問題解決の仕方を目指して、当面する問題群に順位を付した対応をする必要もあろう。

よりよい問題の解決を図るためには、ただ受身の姿勢で待っていたのでは始まらない。問題を解決していくためには、対象に働きかけ、働き返されることを繰り返す必要がある。そういうことを通じて、我々は、自分の世界を広げたり深めたりしていくことができるのである。特に、児童生徒の場合には、まだ経験が十分に詰まれていることもあって、教師の側から積極的にそういう経験を豊かに積む機会を提供するようにする必要もあろう。

児童生徒が、そうした能動的でダイナミックな学習観を身に付けるためにも、教師の側における、指導の観点を明確にした授業実践や、学習指導の工夫改善が、必要不可欠のものとなるのである。児童らの発展的な学びの充実を望むとともに、教員の側における溢れんばかりの創意工夫に満ちた学習指導の充実を望んでやまないものである。

正しいとかよいとかいうことには、絶対的な基準はなく、常に変化する状況の中で、我々は、精一杯に努力して、よりよい生活・行動を展開しなくてはならないのである。そのため、道徳教育にとっては、よりよい問題の解決ということが、非常に重要なものとなる。

## まとめ

道徳教育の充実を進めるに当たっては、道徳教育が万能ではないということを踏まえる必要もある。我々は道徳だけで生きていくわけには行かない。他の様々な生活場面において、道徳とは殆ど関係のない事柄にも多く出会っているのである。

したがって、物事を総合的に見ることが大切である。「総合的な学習の時間で豊かな体験がなされるほど、その体験の意味や道徳的価値の大切さを自覚していく道徳の時間の役割が一

層重要になる<sup>(20)</sup>』とは確かに言える。しかし、総合的な体験が豊かになるにつれ、道徳を中心に自分の生活を支えることの限界が意識されるという事実も尊重せねばならない。

問題解決ということは、学習原理としても人生原理としても、優れた価値を持っているから、十分に重要視されてよい。しかしながら、「問題解決学習は、優れて主体的な学習であるだけに、ともすれば主体的が主観的となり、さらには主我的な独りよがりの問題解決に走りやすい欠陥を秘めている<sup>(21)</sup>」から、この点に配慮することも大切である。

敢えて言うなら、道徳教育は、幼児・児童・生徒の指導に当たって、大変重要でかつなくてはならないものであることはよく分かる。しかし、それは、道徳的に生きることが可能でかつ社会的に意味が認められる場合に限った話である。

同様に、問題解決学習も、「学習問題をとらえ、解決思考の学習活動をしながら、これを追究し解明していく学習方法<sup>(22)</sup>」として、十分重んじられる必要がある。と同時に、一口に問題解決学習といっても、「一つには問題とは何か、二つにはどんな解決か、ということの違いにかかって<sup>(23)</sup>」くる、いわば内部バラエティに関する問題もある。問題の種類あるいは解決の仕方によっては、我々が解決することを諦めなくてはならない問題もあり得るのである。

道徳教育についても、問題解決についても、現実を重んじて、心に響き生きて働くような道徳や、その時と場に応じた適切な問題の解決が、目指されるべきである。

こうしてみると、道徳教育も、問題解決学習も、共に非常に大きな意義を持つと同時に、限界をも持つものと言える。道徳教育や問題解決学習について、その有用性を声高に叫ぶのは、簡単に出来ることかも知れない。しかし、その限界を認識して、時と場に応じた取り組みをすることは、案外に難しいこととなる可能性もある。人間には、自分という存在の状況が、意外と見え難いものになっていることが多いからである。我々は、常に、その時と場において、自分や環境の変化に対応することを迫られているのであるから、そこを基点にして、考え行動する必要がある。

道徳の基本は、自分を大事にしながら、他人の幸福をもなるべく重んじることにあるとは言えないだろうか。また、問題解決の基本は、当面する問題を解決しながら、取り組むべき課題を見つけて様々な解決手段を講じることにあるとは言えないだろうか。

具体的な幸福の中身や、問題点、その解決の仕方などは、時と場に応じて、本人自身が決めるべきものである。周囲の支援・援助が大切なことはもちろんであるが、最終的には、本人が個人の責任において判断すべきことであると言えるであろう。

註

- (1) 『小学校学習指導要領』、文部科学省、平成10年12月、p.1.
- (2) 『小学校学習指導要領解説 道徳編』、文部科学省、平成11年5月.
- (3) 『小学校学習指導要領』、(前掲)、p.p.90～92.
- (4) サルトル、伊吹武彦訳、『実存主義とは何か』、人文書院、昭和38年、p.32.
- (5) 金井肇、『道徳教育の基本原理』、第一法規出版、平成4年6月、p.3.
- (6) 同上書、p.15.
- (7) 同上書、p.19.
- (8) 「マタイによる福音書」、『新約聖書』、5章34～36.
- (9) 太田堯、「教育とは何か」、『教育とは何か』、岩波書店、平成2年、p.6.
- (10) 同上書、p.101.
- (11) 同上書、p.210.
- (12) 大浦猛、『教育の本質と目的』、学芸図書、平成11年、p.7.
- (13) 『小学校学習指導要領解説 総則編』、文部科学省、平成11年5月、p.47.
- (14) 大浦猛、前掲書、p.81.
- (15) 多田俊文「授業の計画・実施・評価」、『教育原理』、学芸図書、平成15年、p.61.
- (16) 天笠茂「学校・学級の経営」、『教育原理』(同上)、p.120.
- (17) 大浦猛、前掲書、p.7.
- (18) 「問題解決学習」、『現代学校教育大事典』、ぎょうせい、平成14年、第6巻、p.274.
- (19) 同上。
- (20) 『小学校学習指導要領解説 道徳編』(前掲)、p.91.
- (21) 「問題解決学習」、『新教育学大事典』、第一法規出版、平成2年、第6巻、p.383.
- (22) 「問題解決学習」(同上)、p.381.
- (23) 「問題解決学習」(同上)、p.382.